

舞鶴市糸井文庫蔵 『浦嶋太郎一代記』

翻刻・語釈・抄訳および英訳・ハンゲル訳（共同研究）

畑 恵里子、園山 千里、荒川 吉孝、金 承子

一 はじめに

本稿は、京都府北部に位置する舞鶴市糸井文庫蔵『浦嶋太郎一代記（うらしまたろう・いちだいき）』を対象として、翻刻に加えて語釈・抄訳・英訳・ハンゲル訳を施した試みである。

『丹後郷土資料目録（改訂版）』（糸井仙之助編、舞鶴市教育委員会、昭和三二（一九五七）年）では、「絵本・豆本」の項目に位置づけられている。作画は鎌田東明としている。

立命館大学アート・リサーチセンターデータベースでは、豆本とする。豆本とは、おおむね五〇mm以下の極めて小型の本である。作者は鎌田在明（よみ未詳）、絵師未詳としている。判型は豆本、全一卷である。明治二一（一八八八）年刊、制作は鎌田在明である。「一丁」六丁迄。作者と板元が同人物になっているが、実際の作者は別人かと付記している。

二 翻刻・語釈

（表紙裏・一丁表）

昔々、

九州辺（しう・へん）の浜辺（はま・べ）にて、所（ところ）の漁師（れやう・し）、

【語釈】○へん おおよその場所を示す語としてもちいる。ここでは九州のあたりの意。

（一丁裏・二丁表）

大（おお）ひなる亀を捕らへてうち殺さんとなすところへ、浦嶋太郎といふ者来たり、かの亀が命を金（きん）にて購い、遙か

【語釈】○購い 「購う」で、何かを代償として別のあるものを手に入れる、また、買い求める意の改まった言い方。ここでは金銭で亀を購入している。

（二丁裏・三丁表）

の沖に流さんとせしに、亀は浦島を我が×

×龍宮（りう・ぐう）に連れ行き、乙姫にかくと

告げしかば、乙姫は大ひに喜び、

【語釈】○× 丁をまたぐ、あるいは同丁のうちで異なる箇所にながが続く目印としてもちいた記号。ほかに、●、▲ももちいる。

(三丁裏・四丁表)

ついに一夢の夢をぞ結びける。

ある時、我が

【語釈】○一夢……いちどの夢、いちど夢を見るあいだの短い時間、はかないさまをいう。ここでは、「一夢の夢をぞ結びける」で、情交する意。

(四丁裏・五丁表)

国へ帰（かへ）らんことを請ふにぞ、乙姫は太郎の別れを惜しみ、玉

手●

●箱といふを渡しける。

太郎、我が国へ▲

▲持ち帰り、かの

【語釈】○▲ 丁をまたぐ、あるいは同丁のうちで異なる箇所に文がが続く目印としてもちいた記号。ほかに、●、×ももちいる。

(五丁裏)

箱の蓋を取りしに、我が歳一千歳（ざい）を知りしといふ。めでたし、めでたし。

明治二十一年十月二十日印刷

同年同月二十二日出版

著作印刷兼発行者

横網町丁目 十八番地

鎌田在明

【語釈】○めでたし、めでたし ものごとが無事に一段落したりよい状態に決着したりしたときにもちいることば。ここでは、自分の歳が千歳であったと初めてわかり、めでたしと言っている。

三 抄訳

昔々、九州のあたりの浜辺に漁師がいた。人々が大きな亀を一匹つかまえて殺そうとしていると、浦島太郎という者がやってきた。浦島太郎は亀を購入して助けて、遙か彼方の沖へ流そうとした。その時、亀は浦島太郎を龍宮へと連れて行き、命拾いをしたことを乙姫へ報告したため、乙姫はたいそう喜んだ。そして、乙姫と浦島太郎とは情を交わした。ある時、浦島太郎は故郷へ戻りたいと乙姫へ願った。別れを惜しんだ乙姫は、浦島太郎へ玉手箱を渡した。玉手箱を故郷へ持ち帰った浦島太郎が玉手箱の蓋を取ったところ、なんと、一千歳の翁になったということだ。一件落着、めでたし、めでたし。

四 英訳

Urashima Tarō Ichidai-ki

Once upon a time, there was a meeting on a beach near Kyushu. Just when folks were going to kill a big turtle that they caught, Urashima Tarō happened to pass by. He bought the turtle to save it, and was about to release it out to sea. Then the turtle took him to the Dragon Palace, and told Princess Otohime of its narrow escape, at which she was delighted. Otohime and Urashima Tarō saw a fleeting dream. Once he expressed a wish to go home. Reluctant to part from him, Otohime gave him a casket. Having brought it home, Urashima Tarō took the lid off, and found himself to be an old man of a thousand years. And they lived happily ever after.

五 ハンゲル訳

『우라시마 타로 일대기』조역

옛날 옛날에, 큐슈(九州)라는 곳 근처 해변에서 모임이 있었다. 사람들이 큰 거북이 한 마리를 붙잡아서 죽이려고할 때, 우라시마 타로라는 사람이 찾아왔다. 우라시마 타로는 거북이를 사들여

도와주어, 아득한 저편의 바다에 흘러 보내려고 했다. 그때 거북이는 우라시마 타로를 용감으로 데려 가서 구사일생으로 살아난것을 오토 히메에게 보고했기 때문에 오토 히메는 몹시 기뻐했다. 그리하여 오토 히메와 우라시마 타로는 한순간의 인연을 맺었다.

어느 날, 우라시마 타로는 고향으로 돌아가고 싶다고 오토 히메에게 간청했다. 이별을 아쉬워한 오토 히메는 우라시마 타로에게 다마데바코를 건네 주었다.

다마데바코를 고향으로 가지고 돌아온 우라시마 타로가 다마데바코의 뚜껑을 열어버려 무려 천 세의 노인이 되었다는 것이다.

이것으로 일단락 해결, 경사문제, 경사문제.

謝辞 本稿作成にあたり、小山元孝氏・小室智子氏・吉野健一氏・ダグラス・ポランスキー氏へ謝意をあらわす。糸井文庫の閲覧および本稿への掲載を許可した舞鶴市へ謝意をあらわす。舞鶴市・立命館大学アート・リサーチセンター作成DB閲覧に伴い、立命館大学教授・赤間亮氏へ謝意をあらわす。

<https://www.arc.ritsumei.ac.jp/archive01/theater/html/maiduru/index.htm>

(二〇二〇年十一月最終確認)。

日本学術振興会科学研究費基盤研究(C)(17K02438)「舞鶴市糸井文庫蔵浦島伝説関連資料の基礎的研究」の助成を受けたことを記し、深甚の謝意をあらわす。